



女僕遊園2

淫乳女戰士水星編

SlaveFighter MERCURY

GLAMOUR WORKS

ADULT ONLY

セーラーマーキュリーこと水野亜美は
先史時代の超文明シルバーミレニアム
からの転生者である
現代に甦った超科学と呪術の融合に
よる超常の力を揮う「セーラー戦士」
として闇に潜む異形のモノどもを
相手に水星の守護者は戦い続ける



或る日の十番町——

「それじゃ水野さんまた明日ね」
「ええ…さようなら」

いつものように夜遅くまで進学塾で過ごした亜美は家路につこうとしていた



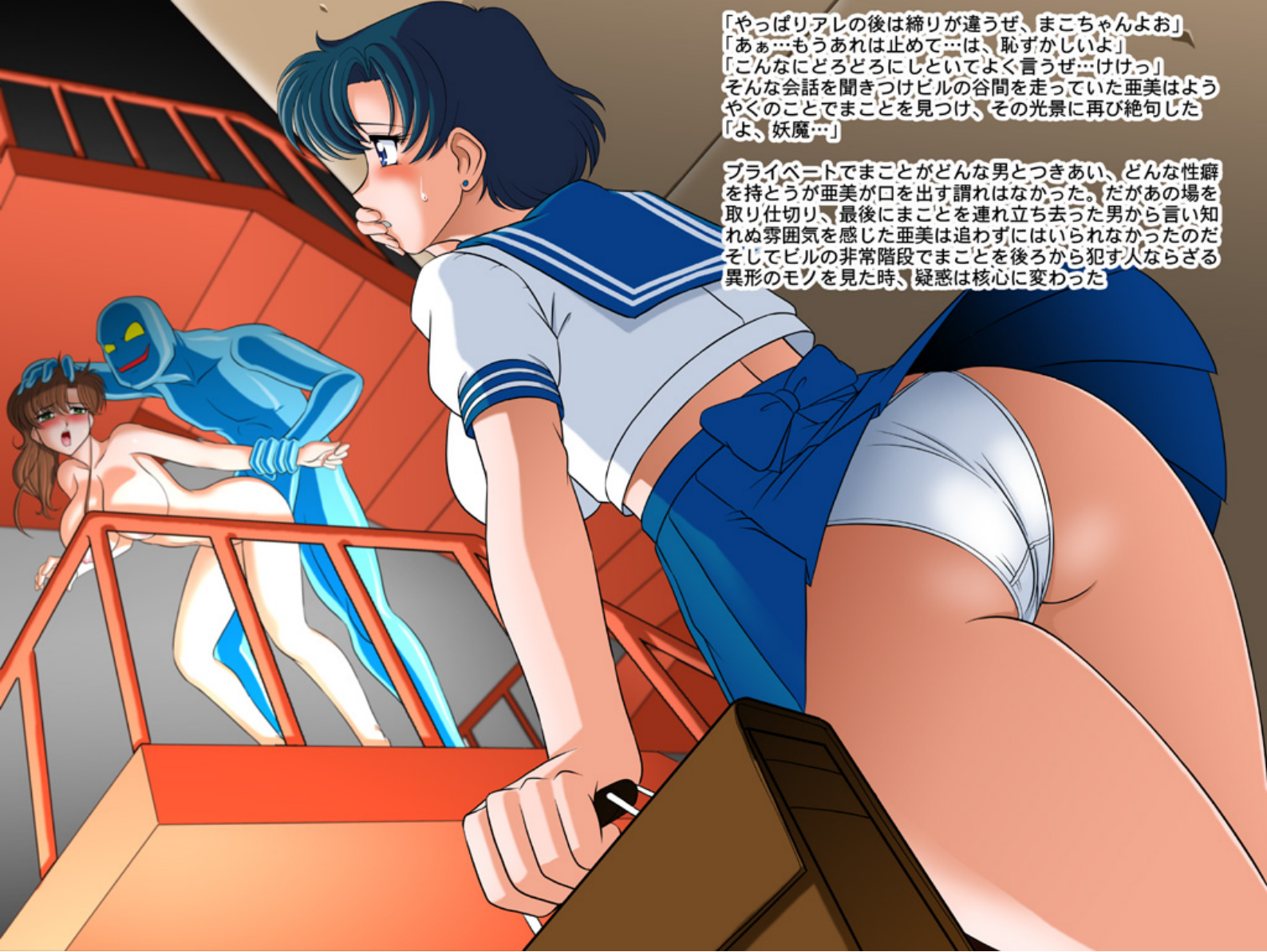


裏通りを歩いていたら亜美はふと立ち止まった。うめきとも悲鳴ともつかぬ声が聞こえてきたのだ。何事かと覗き込んだ亜美の目に映ったのは数人の男たちと彼らに囲まれ白い裸身を晒す女であつた。だが亜美にとって問題だったのは女の顔だつた。友人であり同じセーラー戦士の木野まこと…。呆然とする亜美の視線の先で男たちに命じられるままに次々と痴態を繰り広げ嬌声をあげるまこと。異形の妖魔との戦いとはまた違った非日常の光景に言葉を失う亜美…

「は～い、まこちゃんここでおしっこね」
「…ああ…もう許して…うラッ！」
「うはwエロい！」

「やっぱりアシの後は締りが違うぜ、まこちゃんよお」
「あぁ…もうあれは止めて…は、恥ずかしいよ」
「こんなにどろどろにしといてよく言うぜ…けけっ」
そんな会話を聞きつけビルの谷間を走っていた亜美はようやくのことでまことを見つけ、その光景に再び絶句した
「よ、妖魔…」

プライベートでまことがどんな男とつきあい、どんな性癖を持とうが亜美が口を出す謂れはなかった。だがあの場を取り仕切り、最後にまことを連れ立ち去った男から言い知れぬ雰囲気を感じた亜美は追わずにはいられなかったのだ。そしてビルの非常階段でまことを後ろから犯す人ならざる異形のモノを見た時、疑惑は核心に変わった



「マーキュリーパワー！メイクアップ！」

物陰に潜んだ亜美は変身ペンを取り出して叫ぶ
相手が妖魔となればセーラー戦士の力を用いるのに躊躇いはなかった
まごどが妖魔に付き従っているのには、なにかしら事情があるのかも
しれなかったが己の意思に反じてのことには間違いないであろう
まずは救出した上で事情を確認しても遅くはない
そう素早く判断した亜美は戦闘服に身を包んだ



「セーラーマーキュリー！」

水星を守護星に持つ水の戦士は友を救う為
その身を戦いに曝け出す



「シャボンスプレー！」

己の体内に埋め込まれた術式を起動させるマーキュリー
体内の水分をベースに霧を発生させ目標周辺に散布、視界
のみならず熱光学、電磁波をも妨害すると同時に瞬間的な
気化冷凍現象で目標の行動を阻害するマーキュリー定番の
戦術である





「はぁッ!!」
「ぐわァッ=!!」
マニキュリーの蹴りが妖魔を階段下に叩き落す
蹴りの反動を生かして綺麗に回転し、その場に
着地すると素早くまごとの手をとる
「さあ!!まごちゃん逃げるのよ!!」

だが引張ったその手は動こうとはしなかった
「?...まごちゃん?」
「...ごめんよ...亜美ちゃん...」



「まごちゃん!早くしないと…」
そう叫ぶマニキュリーがまごの額に見たのは
雷撃発動態勢に入ったディアラだった
突如がばるとマニキュリーにしがみつくまご
「ぎやああアアーツ!」
肉体を貫く雷の衝撃に気が遠くなっていくマニキュリーの
耳に最後に聞こえたのはまごの消え入りそうな声だった
「ごめん…」



「はァッ! アァッ! …な、なぜなのぉ!!」
どこかの空き倉庫らしい一室でマーキュリーは妖魔たちの
慰み者として体中を揉みくちやにされながら叫んだ
「…」
マーキュリーの悲鳴を聞いたまごとは
何も言わず気まずそうに目を逸らす
「ぐへへ…あの女はなあ、俺たちのちんぽ
無しにはもう生きていけねえのよ!!」
「助けようなんて余計なことをしなけりゃ
見逃してやったものを…
バレちゃあ仕方ない」
「まごちゃんに感謝しろよお
オマエは始末するしかねえと
言ったら泣いて土下座して
命乞いをしてくれたんだからよ」



「げへへへ…持つべきものは友達だなあw
そういう訳だから今日からオマエさんは俺たちの肉奴隷2号ってことだ」
「そ、そんな！」
「なあに慣れりゃいいもんだぞ」
マーキュリーの股間の秘裂を舐めまわしていた妖魔が突如硬くなった肉芽をつまみあげる。同時に舌を膣に深く挿じいれ押し上げた
「ひゃうッ!!きやあ!い、いやあ見ないでえ!!」
素早い刺激の連携に襲われた秘裂は勢いよく黄色い噴水をマーキュリー
の意思とは関係なく吹き上げ始める
「あアツイヤアッ！」
「グヒヒヒ…甘露甘露…」
マーキュリーの小便を美味そうに飲み干す妖魔

「ひ、ヒッ! や、やめて! 許してえ!
いっいや! アァー! いやあ!

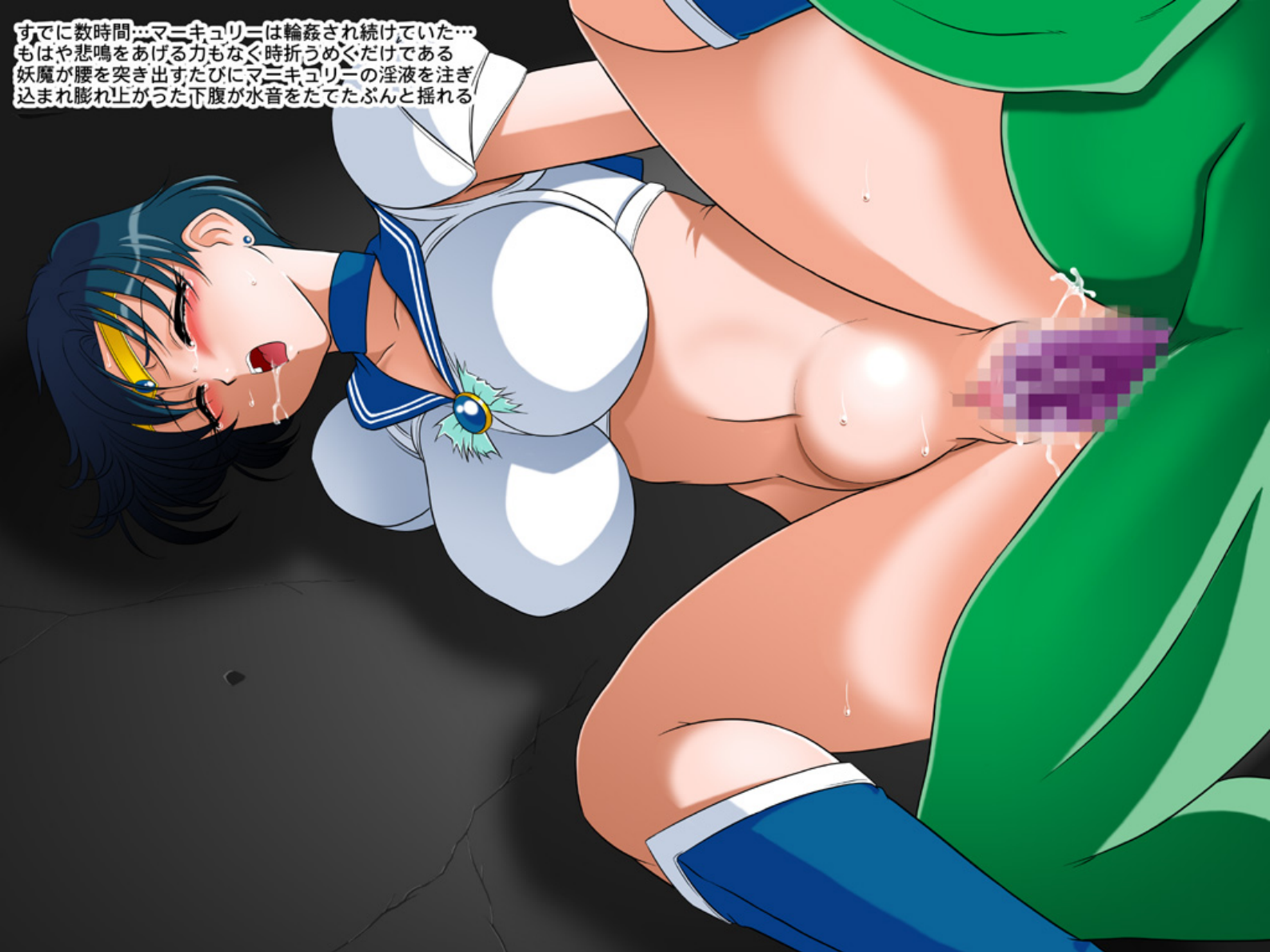
妖魔に押し掛かれマーキュリーは泣き叫び体をよじる
「ここでやめられる訳ねえだろ…よつと」
マーキュリーの狭い腔を妖魔の極太肉棒がぶちぶちと
音をたてるように押し広げ容赦なく貫く
「うッぎいアァーッ!」
異形の人外に純潔を汚されマーキュリーは絶叫した



永遠に続くかと思われた肉虐はようやく終わりを告げズルリと
肉棒がマーキュリーの膣から引き抜かれた
荒い息をつき喘ぐマーキュリーの上に別の妖魔が押し掛かる
「のびてんじゃんじゃねえぞ。まだまだ始まつたばかりだからな」
新たな肉棒が蹂躞されたばかりの肉襪を再び押し広げかき回し始めた
「うあアッ！もうやめてえーッ！」
マーキュリーの悲鳴が空しく響く…



すでに数時間、マニキュリーは輪姦され続けていた…
もはや悲鳴をあげる力もなく時折うめぐだけである
妖魔が腰を突き出すたびにマニキュリーの淫液を注ぎ
込まれ膨れ上がった下腹が水音をたてたぶんと揺れる



「アニキ、俺らは今日はこの辺で…」
「ん？なんだオメニら、もう終いか？」
「へへ…ちよつと野暮用で…」

「うっ…うっ…うっ…」
手下の妖魔たちの足音が遠ざかっていくのに入れ
代わるようにマニキヨリニが嗚咽を漏らし始めた





だが、それは泣き声ではなかった
「ふ…ふふ…これが…妖魔の責めなの？」
「ん？…なんだと？」
「この程度…な、なんでこことないわ」
そう言うとマキヨリニは片足を上げるや
「んっ」と力む。すると股間からどろりとした
液体が流れ落ち、それはたちまち勢を増じて
腫から妖魔の淫液を排出し始めたではないか
「なにっ!!？」
「私の専門は水よ…こんなものいくら注がれた
ところであなた達の思い通りになると思った？」



「…いいだろう…俺が直々に相手をしてやろうじゃないか」

妖魔たちのリーダーはマーキュリーの足を広げるや股間の肉棒いや触手をずぶりと膣穴に沈めた

「う…ぐう…」

「ふ…ひとつ芸を見せてやろうじゃないか」

「ひぎッ！」

突然マーキュリーの腹部がぼこっと盛り上がり悲鳴があがった
「俺は体の形状を自由自在に変えられる…身動きひとつとらずに
オマエの子宮を突き上げることだってできるんだぜ？」

「ぐらッ！グふッ！うがッ！」

「くくく…セーラー戦士ってのは頑丈でいいよな
普通の女だったら腹を突き破ってとっくにくたばってる
ような責めでもびくともじねえんだからよお！」
立て続けに内臓を突き上げられ悶絶するマーキュリー

「さてそろそろオマエの子宮に俺の分身を仕込んでおくぜ
コイツでオマエはもう俺の意のままに動く肉人形よ」
「…やはりそういう仕掛けだったのね」
「まあそういう…ぐッ!？」





「な、なんだ!!か、体が動かねえ!」
「かかったわね…ふふ…」
「き、貴様なにかしたのか!?!」
「さっき私の専門は水って言ったわよね?
でも専門はもうひとつあるの…情報戦よ」
「な、なににッ!?!」
「粘液を媒介に相手の体組織の神経伝達に介入して
支配する能力が仇になったわね…あなたが私の神経
につながった瞬間が私からもあなたにつながったと
いうことよ!後は処理能力の大きいほうが勝つわ…」

妖魔はマーキュリーとつながったままゴロンと仰向けになる
「ふふ…どう?もうここまであなたの体を動かせるわよ」
「ち、畜生!!こ、ごんな…」



「ぐぬぬ…ぬんっ!」
妖魔は死力を振り絞るとマニキュリニの尻をがっちり掴み押さえ込んだ
「無駄よ…もうすぐあなたの…」

「来い!まことおツ!」
「え?」



それまで部屋の片隅にいたまことが呼び声にびくりと反応するや立ち上がった
何事かとするマ三キュリ三の前でまことの股間の割れ目がもそもぞと動くや
ずるりと顔を出したのは目の前の妖魔と同じ粘液の触手だった



「コイツの尻を犯せ！今すぐだ！」
まことは言われるままにゆらりとマーキュリーに近づくと覆いかぶさった
「や、やめて！まこちゃん！お願い！」
「無駄だぜ！コイツはもうどんな命令だって聞く肉人形さ！」
めりめりとマキューリーの肛門に触手がめりこんでいく
「アアッ！うあアアッ！」





「ひいいいッ!!
アッ!あぐあッ!!」
マーキュリーの肛門に侵入した触手は直腸に留まらず
まことの股間からドクドクと脈を打ちながら更に内臓
奥深くへと暴れる蛇の如く突き進んでいった
「ひぎッ!と、とめてえッ!
あうッ!あぎゃッ!!」
はらわたを抉りまわされる激痛に、もはや妖魔を支配
するところではない
「さっきまでの威勢はどうした?ん~」



「うぼおあッ！！」

ついに触手が内臓を貫通し口から飛び出した
白目を剥きビクビクと痙攣するマーキュリー……

肛門から口まで触手に貫通されたマーキュリーは声もだせずに自身を男根と化したかのように屹立し、ただ痙攣するだけだった「……ったく、おとなしそうな顔してどんでもねえこと企みやがるまあいっ神経接続は完了した。肉奴隷2号の完成だ」



「おっと、舐めた真似をしてくれた礼がまだだったな」

「んオツ!!!」

マーキュリニの乳房と腹が妖魔の肉体操作により爆発的に膨張し、戦闘服の切れ端が舞う声にならぬ絶叫を響かせながら痙攣するのみのマーキュリニは意識が遠のく…
(…し、死んじゃう…)



激痛と呼吸困難で気絶しかかったマーキュリーであったが
突然喉から触手が抜け落ちたため激しく咳き込みながらも
意識を取り戻した「げほ!!!げっうげえ!!!」
「さっき責めがぬるいとかご不満の様子でしたなあ…」
妖魔はニヤつきながらマーキュリーの乳房に手を伸ばす
形の良かったマーキュリーの胸は今や醜く熟れた肉の果実
として彼女の眼前に垂れ下がっていた
「聞の者ならではの責めというものを味わってもらおうか」
「ああ…ああ…」



「ひいッ!アヒイッ!」

マーキュリーの目に信じられない光景が映し出されていた
右の乳首は妖魔に指につままれた瞬間男根の如くむくむくと勃起しその手でじごかれるたびに乳蜜を噴き上げていた
左の乳首は妖魔の指が突きだてられるや押されるままに沈みこみ肉穴と化じて妖魔の指を汲々と締め上げたのである
両の胸ともにいじられるたびに経験したことのないような快感が乳房から脳に駆け抜け泣き叫ぶのみであった...



「さて慣らしはこんなもんか…」
妖魔はマーキュリーの乳首を弄びながら笑う
「なあ、自分で自分を犯したらどんな気になると思う？」
「…え？」
「今からそいつを味合わせてやるよ!!」



「アアアッ！あ——ッ！抜いてえッ！」

妖魔はマニキュリニの勃起乳首を乳首穴に捻じ込んだ
連結された乳房が生き物のようにぶるぶると震え時折
挿入口から乳蜜が漏れ噴出しマニキュリニは泣き叫ぶ
「抜きたぎや自分で抜けよ。俺は押さえてないぜ？」
「がらちり啜えこんで離さないのはオマエ自身さ」
「そ、そんなあ……うあアッヒイッ！」



射精のように乳蜜を噴出すたびに快楽にのたうつ
マニキュリニであつたが噴出す乳蜜の圧力はつい
に水風船、いや乳風船を破裂させるような勢いで
膨れ上がったふたつの肉塊をはじけ飛ばした
「アああアア——ツ!!!」





既に何日が過ぎたのか…亜美は犯され続けていた…まことと同様快楽責めと絶え間ない輪姦に晒されているが、それでもなにを企むか知れたものではないと言われ、常に拘束具に括りつけられている有様だそれでも足りず亜美の胸はあの日以来重しとばかりに膨れ上がった肉袋として垂れ下がっている…

妖魔たちの手が空くとまことがやってきては亜美の肉体を執拗に弄り回した食事はまことからの口移し、糞を垂らせば肛門まで舐めまわされるといった具合にまことの舌が触れてない場所はないくらいだ今もまことが亜美の勃起乳首を舐めている「もうこんなにミルク溜まっちゃって…又イてあげるよ…亜美ちゃん」「ああ…まこちゃん少し休ませてえ…」亜美にとってこの勃起乳首は胸の先に男根がついてるようなものなので下手に弄られ乳蜜を噴射すれば、射精後の疲労感すら味わう厄介モノだった

「アアッ!ひいッ!ひんッ!」

まことの柔らかい乳房が亜美の硬くそそり立った乳首を優しく揉みじだき刺激を与える
亜美が乳蜜を噴出しそうになると
絶妙の緩急でそれを止める
「アア!!まごちゃん!!お、お願い!!
もうおっぱい出させてえッ!!」
射乳を焦らされ、まごとに哀願する
以前の亜美なら二度たりとも
見せたことのない表情である



「それじゃあこっちにお願いね」

「あひいッ！」

まことは尻を突き出し亜美の乳首を己の秘裂に導く
まごとの膣にずぶりと沈み込む肉棒は
まさに男根そのものと言ってよい
「ふふふ…一発だしたら次はお尻だよ」
「ああ…もう許して…」





「んぶ...ま、まごひゃん...」
「あむっ 亜美ちゃん...」
「ほら!もっと舌を絡めろ!!気分だせ!!」
後ろから膣に肉棒を埋め込まれ前はまごとの
勃起乳首と肉穴に己のそれど入れ交わす亜美
それに加えまごとの巧みな舌使いに
亜美は何も考えられなくなっていた
ただ肉の感触に溺れるのみである



「ほら…亜美ちゃん。アタシもお願いして
亜美ちゃんと同じおっぱいにしてもらったんだ」
互いの硬くそそり立つ乳首が
互いの肉穴乳首を犯す…
異常な状況での異常な快楽に
亜美はいまや熱に浮かされた
ようにうめくだけである

「ね…亜美ちゃん一緒に堕ちよう?…」
「ああ…まこちゃん…」



東京湾を望むビルの屋上で妖魔が口を開く
「さて今夜は働いてもらうぜ？」

「大丈夫だよ亜美ちゃん…」
不安そうに妖魔とまことを見比べる
亜美を優しく励ますまこと

二人はいよいよ闇の
戦いへと駆り出され
ようとしていた…

「がはははっ!!今夜はまた団体できやがったな!!」
妖魔は哄笑を響かせつつ辺りを見回す
周囲をダイモーンの大群に囲まれる中、二人の肛門にはそれぞれ
妖魔の腕がすっぽりと埋め込まれ肉体を支配されていた
戦士としてではなくただ技を放つだけの肉兵器と化した二人
四つの乳房がぶるんと揺れる…それが合図だった





「唸れ水流！轟け雷光！」
妖魔の命令が二人の肉体を跳ね上がらせる
「しゃ、シャインアクア…イリユージュン…ッ！」
マニキュリーの両乳首から放たれた超高水圧の噴乳がダイモンたちを打ちのめす
「よし次だ！」
「しゃ、シャボースプレエ！」

悪夢のような戦いは続く…



「大勝利!! いやあ拾いもんだぜ。オマエがこれほど使えるとはな」
あれだけいたダイモンたちは既に一掃されていた
二人を掲げガッツポーズをとる妖魔だが
当の二人は精力を絞りつくされ無理矢理に
強威力の技を連発させられた為、息も絶え
絶えに痙攣するのみで返事はない



「この調子なら連中の本拠にこっちから出向いてもいいかもなあ！」

その時だった
「…ウ…」
「ウ？」
背後に気配を感じた妖魔が振り向こうとした…



妖魔の断末魔の叫びとともに二人は投げ出された
「は…はるか…さん?…」
何事かと顔を上げたマーキュリーの眼前にいたのは
異形の姿へと変貌をとげたセーラーウラヌスであった
その顔にはダイヤモンドの証たる黒い五芒星が見えた
身動きもとれぬ二人にダイヤモンド「ウ・ラヌス」が迫る…



どことも知れぬ地下施設…闇の組織デスバスターズの本拠である

「…これかねカオリナイト君。新しく入手した実験動物とは」
「ええ、教授」
「それでなにか面白い使い道はあるのかね？」
「現在運用中の被検体1号と同じ仕様は難しそうです
闇の者どもにかなり侵食されてるようでダイモニ化には
障害が多いのではないかと簡易検査で報告されています」
「ふむ…で？」
「P結晶実体化の実験体として使用したいと要請があがっておりますが…」
「まあそんなところだろう。よろしく手配してくれたまえ」
「…はい教授」

水槽の中でゴボリと気泡が沸いた…

水星編—完—